

追い詰められた“虚人の星”

年頭のお薦め読本

伊豆の山 川瀬渉貴

島田雅彦著『虚人の星』は、講談社の月刊誌「群像」に連載された作品で、昨年9月発行したものです。

本屋に並ぶ新刊本の帯には「総理とスパイの意識を丸裸にする驚異の一人称語り。戦後70年の分岐点、進むべき未来を照らす傑作長編小説」と謳っている。

目次はないが、章立ては次のとおりで、二人の語り手が一章ごとに交互に登場し、外務省勤めのスパイ星新一が「私」、まるで現アベ総理を擬したような三代目の世襲総理の松平定男が「オレ」の一人称で物語が進行します。

1. 世界で最も孤独な職業 2. 世襲総理の自我 3. レインボーマン 4. 心の内なるドラえもん 5. 父のふりをした他人と他人のふりをした父 6. オレはゾンビではない 7. レインボー・イン・チャイナ 8. みなしごハッチ 9. もぐらたちの肖像 10. 優柔不断なタカ派 11. 国家の自殺 12. 憲法変えてもいいですか？ 13. のび太の無意識 14. ドラえもんの暗殺計画

次に、1～2頁、抜き書きでご紹介しておきます。

『居酒屋にお供し、酌をしながら、私は幾度となく彼の憂い顔を見てきた。巷では彼のことを「史上最も愚かな首相」とか、「ピノキオ総理」などと噂しているが、そのことを多少は気に病んでいるに違いない。確かに思慮に欠ける男であるが、繊細なところもかろうじて残っている。自分にまつわる不愉快な噂を払拭するために国家保安局を私的に濫用したり、文字どおりピノキオのように自分を操る糸を切り、自らの意思を通そうとするあたりに、ナイーブさが見え隠れする。自分を誰よりもタカ派に見せようと虚勢を張るのも小心の裏返しだろう。

私たちには少なからぬ共通点がある。第一に私たちはともに嘘つきである。スパイは二重三重の嘘をつき、時に自分さえも欺く。私には七つの人格が備わっていて、意見も立場も異なるので、もともと、本心なんてものはない。私のいうこと、考えることは全てが嘘で

あり、かつ真実である。私は相手によってコトバや態度を変えるが、人を騙しているつもりはない。

おそらく全く同じことを総理もしている。彼は憲法を順守すると施政方針演説で誓っておきながら、確信犯として違憲行為を繰り返している。平和主義を唱えながら、戦争準備に余念がない。言論の自由を守ると約束しながら、自分に批判的な言論人の仕事を干し、平等な社会を実現すると謳いながら、富裕層を優遇し、格差を広げている。富の再分配と利益還元を呼びかけながら、原発を稼働し、津波や土砂災害の危険区域を放置している。情報公開を進めるといいながら、政府にとって不都合な事実を秘密情報に指定し、隠蔽を図る。

総理の舌は2枚どころか、毎月生え変わっている。まさに矛盾そのものを生きている。誠実な人間なら、深刻な心の病は避けられまい。仮に完全無欠な人工知能に総理の職分を代行させても、やはり狂うだろう。

総理は職務上の矛盾に対処するためか、自分の内に交代人格を育てた。そこも私と共通している。私はレインボーマンに自分の職分を代行させ、彼はドラえもん総理の言動を委ねている。双方とも職分を離れ、自我を緩めている時、素の自分と向き合っている。私が居酒屋で見ているあの憂い顔の男は、ドラえもんに依存するのび太、つまり松平定男その人に違いない。居酒屋「佐助」に通うのは、庶民とふれあい、その痛みを理解するためだと官房長官はいつているが、松平定男自身は総理の立場から逃避できる場所を求めているのだろう。』

さて、どんな終局を迎えるか？ 現実の迷走ぶりのほうがすさまじく、落としどころに困惑し変えてしまったと若者が言うところの結末は、読んでからのお楽しみにしておきましょう。

武器や原発等の輸出が成長戦略の第一歩とばかり、狼少年よろしく不安のタネの安売りに地球を飛び回っているアベ政治は、まさに「虚の星」へとまっしぐらに突っ走っているのではないのでしょうか。あわせてみんなで考えてみたい新年です。

九条の会さかど 早春のつどい

日時 2月14日(日)13時から16時

会場 坂戸駅前集会施設(2階)

参加費 1500円(食事・飲み物)

一緒に食べて、一緒に飲んで、みんなであたって!

9条のこと、平和のこと、伝えたいこと、やりたいこと、一人ひとりの思いに耳を傾けましょう。食事と飲み物の用意をしますので、ご参加を2月11日(木)までにご連絡ください(049-283-4723 栗原)

63歳でもらった卒業証書

鶴舞 三浦輝夫

私が東京都江東区立臨海小学校から、「昭和20年3月31日」付けで国民学校初等科(今の小学校)終了の証書の交付を受けたのが、平成8年3月22日のことである。年齢63歳になっていた。ようやく小学校を卒業できたのかと複雑な気持ちになったのを記憶している。

振り返ると大東亜戦争(太平洋戦争の日本側での公称)末期、敗戦が近づき、日本本土空襲も時間の問題となり、各分野での疎開命令が発動された。その中のひとつに、次世代の戦力確保のための学童集団疎開がある。3年生～6年生が対象だった。深川区の児童の疎開先は新潟県にきまった。

私が北蒲原郡安田村(現在の阿賀野市)に疎開させられたのは昭和19年8月のことである。宿泊先はお寺と旅館との分宿だった。3年生の中には夜半に東京の家族を思い忍び泣く子どももいた。

6年生は昭和20年3月、母校での卒業式に出席するため帰京した。自宅に着いたが、疎開する以前に比べ家庭内の様子が変わっている。窓ガラスが割れないよう紙テープが十文字に張られている。灯火管制のため、夜は電灯の傘に黒い布をかぶせて減光する。

寝るときは着の身着のままで、枕元に防空頭巾を置いた。全てが空襲に備えることだったのだろう。さらに驚いたことは、各家庭の床下に防空壕が作られていたことだった。

当時は、隣組で防空訓練をやっていたが、避難訓練はやっていない。我が家と仲の良い近所の人達の間では、空襲で「爆弾の時は防空壕」「焼夷弾の時は裏の商船学校の運動場」に逃げるのが合言葉だった。間もなく3月10日の東京大空襲に見舞われた。風が強く火の手が上がっていたが、母と姉の3人で合言葉を守り商船学校運動場に逃げ難をまぬがれた。警棒団にいた父と中学生だった兄は単独行動だったが、父と明け方、兄とは大分遅くなってから避難場所で落ち合うことができた。

ちなみに、下の姉は勤労働員で宮城県多賀城市の軍事工場にいたが、本所区に嫁いでいた長姉と子どもを含めた5人家族は全員が焼死した。母の嘆きが目に浮かぶ。

学童疎開先から一緒に帰京した同級生も、記録に残されていないが半数以上が死亡したのではないかとされている。深川区は特に空襲によって壊滅的な打撃を受け、母校消失、友達とは音信不通となった。

時は流れて昭和から平成に入ったある日、新聞の「ふれあい欄」に、母校の同窓会と連絡先に同級生の名前を偶然見つけた。それがきっかけで、空襲で生き残った6年1組のクラス会が始まり、卒業証書をもらうこ



とができたのである。空襲で死んだ児童たちは、国民学校と戦争以外知ることは無かった。

このところの流れを見ると、戦争中のように。しかし、地震や洪水と違って、戦争は止めることができる。今こそ大人の責任で「憲法9条」を守り、二度と子どもたちを戦火にさらしてはいけない。

語り継ぐ会の感想から

◆ 姉家族5人が全員空襲によって亡くなっているらしいというのに今もそのことがはっきりしていないというこの語りには、あらためて戦争のむごさを確認した思い。そんな体験を持ちながら、今までしっかりと生きてこられた三浦さんのすごさを思った。

戦争時代をくぐり抜けて、生き続けることがいかに厳しいことであったかを語りからしみじみと知ることができた。今の戦争に向かうような動きをくい止めたい。(新井竹子)

◆ 疎開先が新潟県の村のためか、食べ物には困らなかったことや、東京大空襲(深川)の時に住まいは焼けたが家族全員が無事だったこと、同級生と連絡できる状況であったことなど、私の体験とは違った状況だと思いました。

しかし、「憲法9条と自衛隊」「沖縄の自治と政府の態度」については、わたしの考えとほぼ一致していました。(石川)

◆ 貴重なお話ありがとうございますと感謝いたします。近所の人達との「愛言葉」で家族の皆さまが助かったこと、シベリアに行った人は帰ってこないとお話しされたとのこと、色々のお話、ありがとうございます。

孫崎さんの発言に

元町 新井竹子

昔々「民主連合政府」を作ろうと燃えたことがあったが、今振り返ってみると、それはまだまだ限られた人々にしか受け入れられなかったと思う。ところが今回の「戦争法(安保法制)廃止の国民連合政府」という日本共産党の提案は、現在の状況に的を得ている。

この提案を知った時、灯りが見えた気がした。60年安保闘争を超えて55年、私たちは確かな力をつけてきたのだ。

こんなことを思っている時に、私たちをより一層を励ましてくれる孫崎享さんの発言を知った。元外務省職員でありながら、心から私たちの味方をしてくれている。今回の発言も素晴らしい。みんなで繰り返し読んで力にしたい。

「安保法制、戦争法の成立で、日本は本当に危機的状況です。憲法のない国になってしまう」。このようにしないために立ち上がらねばと切に思う。

今後の運営委員会(会員なら誰でも参加できます)

2月25日(木)、3月24日(木)、4月28日(木)10時～12時
北坂戸出張所内「坂戸市市民活動交流フロア」会議室
(溝端公園に面した「埼玉りそな銀行の看板」が目印)